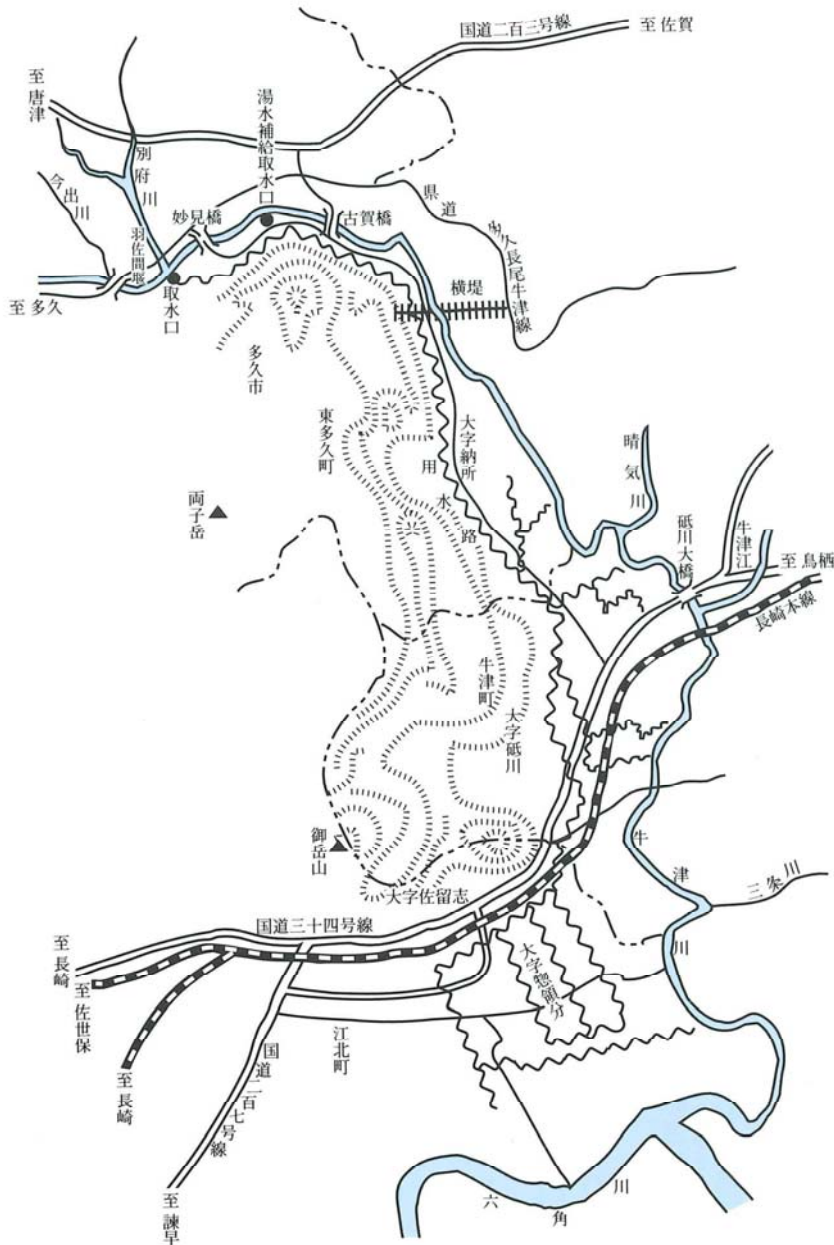


十三 水を生かし、水にさからわらない水道開発

— 多久市から江北町への羽佐間水道 —



羽佐間水道取水の見取図

佐賀平野の西部地域に、西から東へゆつくり蛇行する六角川があり、北から流れてくる牛津川と、河口付近で合流しています。

標高二四三メートルの御岳山の頂上に立った一人の武士が、二つの河川に囲まれた荒れ地を眺めながら、「ここに水が引けたら立派な水田が開けるのにとつぶやいていました。

ありあけかいえんがんちいき
有明海沿岸地域の農民にとつては、広大な平野も、



現在の水田全景 (写真提供：江北町役場)

海水が逆流する低地であるため、これらの河川の水を農業に利用できないもどかしさがありました。

成富兵庫茂安は、山間部から水を引くため、絵図を広げ、家来に「良い知恵はないか」と相談をしていました。そのとき、ふと、思いついたのが、牛津川の上流にある多久市東多久町の羽佐間の地に、川をせき止める井手を低く設け、右岸の分水路に水を落とし、山麓に沿って導水するというものです。それは、今からおよそ三百年前のころ

頂上から平野を眺める茂安

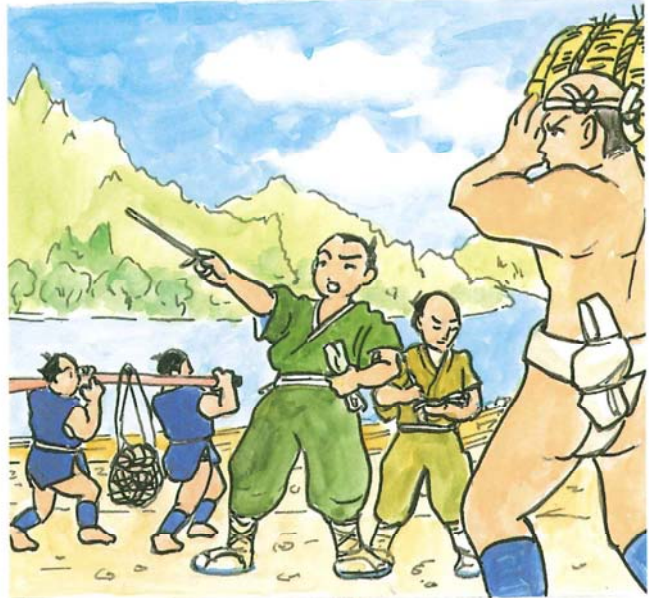


でした。

一六〇〇年、天下分け目の「関ヶ原の戦い」がおこり、徳川家康の率いる東軍が勝利をおさめました。

茂安は、天下は家康公のものになったので、戦いはもはやこれまでであろうと考えていました。その後、大阪冬の陣、夏の陣を最後に大きな戦乱は起こらず、世は天下太平になりました。「これからは経済の時代になるのではないか」と悟った茂安は、土地を開き、水を治め、生産を増やすのが、これからの仕事であると決意を新たにしました。

豊臣氏の時代の初め、佐賀の地では、龍造寺氏が、一時は五国



工事を指揮する茂安

二島を支配する勢いであったが、鍋島氏が龍造寺氏の後を継いだころは、肥前一国のみになっていました。佐賀藩は、財政的にも極めて困難になっていたので、倅約の必要さを他藩よりも深刻に受け止めていました。

このような時期に、米の生産を増やし、佐賀藩の収入を増やすことは、藩としての大きな課題でありました。

新田を開発し、ため池を造り、水路改修等の工事が、経費を節約しながらも積極的にすすめられたのは、茂安のすぐれた土木技術と藩経済の立て直しとがあいまって推進されたものです。

羽佐間水道の工事は、一六一五〜三四年（元和〜寛永）に取り組

まれ、多久市東多久町羽佐間から、等高線を巧みに活用して両子山のふもとをまわり、小城郡牛津町砥川を経て、杵島郡江北町留志まで、総延長約十二キロメートルのゆるやかな流れをもつ水路が掘られたのです。その結果、六二〇ヘクタールの水田を潤すことになりました。茂安は工事がはじまると、自ら現場に出かけ、湯茶を用意したり、農民と寝食を共にしながら、彼らが喜んで作業に取りかかれるよう気を配っていました。

現在の羽佐間堰
(多久市東多久町羽佐間)



完成した羽佐間水道は、代々農民に受け継がれ維持、管理されてきました。今日では、羽佐間水道土地改良区が担当しており、用水の配分方法は、昔ながらのかんがい面積に応じた時間配水表によって行われています。

成富兵庫茂安は、この他にも総括責任者として、千栗土居の築堤、嘉瀬川の石井樋、六角川の水利、有明海の干拓事業等に取り組みます。

一六二七年（寛永四）、佐賀藩は慶長検地のあとでおよそ五万石の新地をつくったと江戸幕府に報告していますが、その多くは茂安の工事に関係するものでしょう。

このような新田の開発は、幕府や藩が中心となって日本全国で行われましたが、資本に富む町人にも開発させ、一八世紀の初めには、耕地面積は戦国時代にくらべて倍増したといわれます。

佐賀の地では、成富兵庫茂安という人材を得て、数多くの水利事業を成し遂げ、農業生産基盤をつくりあげました。それは、今日でも立派に生きて活用されているのです。

皆さんも、身近な地域にある水利関係の施設を調査研究してみませんか。きっとすばらしい発見をし、先人の業績に驚きをもつことでしょう。



水功の碑（大和町石井樋）

羽佐間水道（多久市立納所小学校付近）

